

フジツボ養殖 実用化手応え



研究グループが三沢市漁協と協力して試験養殖しているフジツボ。半年ほどで直径約3センチに成長した。2019年9月、三沢市鶴見特任教授提供

八学大教授ら研究グループ

種苗生産を効率化

漁業者の所得向上につながる養殖品種として1990年代前半から本県などで行われてきたミネフジツボの養殖研究が、ようやく実用化に近づきつつある。現在、八戸学院大の鶴見浩一特任教授と階上町の県栽培漁業振興協会の主導で研究を重ねて、種苗生産を効率化。2年前から県内漁協と連携している海中での試験養殖では、従来を大きく上回るスピードで成長する種苗が確認されている。(大久保拓地)

フジツボはエビやカニと同じ甲殻類で、卵からふ化した幼生が2度の変態を経て外殻を持つ成体となる。ミネフジツボは国内で最も大型で直径約1.5センチ、高さ最大10センチに成長し、甲殻類特有の甘みと濃厚な磯のうまみの特徴とする。青森市では7種類の魚卵と8種類の珍珠を集めた「七子八珍」に名を連ねる。養殖ホタテが浜値で1.5当たり



フジツボ養殖の実用化に取り組む鶴見特任教授(左)、松橋専門員(中)ら研究グループ。4月22日、階上町

【ミネフジツボの養殖】本県では1990年代前半、旧県水産増殖センター(平内町)現県産業技術センター水産総合研究所が基礎調査をスタート。養殖の有力品種となる可能性があるとして、93年に北里大学水産学部(岩手県)との共同研究が行われた。98年からは効率的な生産を

目指すため、5年にわたり陸奥湾などで開発試験が行われたが、収穫に3〜4年を要することや、附着物の除去に多大な労力が必要などの課題が明らかになり、普及には至らなかった。かつては自然採苗でのフジツボ養殖に取り組む県内業者もいたが、現在ほとんど残っていない。

数百円に対し、2千〜3千円ほどの値が付く。養殖は従来、海中に付したホタテの貝殻に付着した個体を収穫していた。鶴見特任教授は2015年、愛媛大や北里大の研究者らとともに、シリコンを塗った養殖板にフジツボを定着させ、1個体ずつの収穫や附着物の除去を容易にする技術を確認した。16年には同協会の松橋専門員が、採算に見合う個体で幼生をフジツボまで変態させることに成功した。18年からは川内町漁協(むつ市)と三沢市漁協と協力し、漁港内で試験養殖している。

幼生の変態を成功させたとはいえ、同年に試験養殖に必要な大きさまで成長した個体は数百にとどまった。全体の100分の1程度で、残りはその前に死滅した。餌のフランクトンに問題があると考えた研究グループは、水槽の光源を日光から発光ダイオード(LED)に変更し、昼夜を問わずフランクトンの増加を促すなど培養方法を改善。良質な餌を安定投与できるよつにしたことで、今年の試験養殖のサンプルは18年の数倍に当たる約2千まで増えた。昨年は、三沢市漁協の種苗の多くがしけて流された。十分なサンプル数が集まらなかったが、育った種苗は半分の状況で種苗を育てる。4月22日、鶴見特任教授と松橋専門員、養殖板の改良研究を行っている東北総合研究所(八戸市)の担当者らと協議して今年も試験養殖を確認した。

「手探りで始まった研究だったが、失敗を経たかなり進展したと感じる。漁業者の問い合わせも増えてきている」と松橋専門員。10年以上研究に取り組む鶴見特任教授は「養殖したフジツボが青森の名産品として多くの人に食べてもらえる日が待ち遠しい」と期待を述べた。